君を想い

神昇 龍如

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君を想い

【Ｎコード】
Ｎ８８４３Ｗ

【作者名】
神昇　龍如

【あらすじ】
入学した高校で２つ上の先輩に一目惚れした１人の少年。
そんな彼がいきなり取った行動がその先輩へのいきなりの告白。
だけどその告白が成功し付き合う事となった。
しかし…その日から辛く苦しい日々が始まる。

俺と君

まだ桜が舞う４月の初め…俺は君に視線を奪われた。

あれはきっと君のイタズラだったのかもしれない。

君が俺を試す為のイタズラ…そして俺は君の罠に引っ掛かってしまった。

そう…あれが全ての始まりだったんだ。

あの日から俺達の苦しくて辛い日々が始まったんだ。

桜咲くあの日から…

君は覚えているかい？

あの日あの場所で君に告白した事を…

今でも覚えていますか？

ガチガチに震え緊張していた俺の顔を…

俺は今でも覚えているよ。

あの時の君の表情…君の匂い…君の声…

俺は君の事をいつまでも想い続けるよ。

それが君にした初めての告白で初めての会話でもあった。

今思うと何故君はあの時俺の告白をＯＫしてくれたんだろう…

それが今でも不思議で俺の中で唯一解くことの出来ないナゾだ。

君は今何をしてるのかな？

俺は君の事を忘れる事が出来ないよ…

逢いたい…逢いたくて…逢いたくて…たまらないよ…

俺は…今も君の中に…居ますか？

桜と告白

そう、あれは今みたいに桜が綺麗に咲き誇り、まるでその場所だけがピンクの雨が降り注いでいるかのような…

そんな夢みたいな場所で君は座り本を読んでいた。

そして、それが俺と君の初めての出逢いでもあった。

「おいっ！圭司っ！何処行くんだよ！」

友達が叫ぶ中、俺の足は君へと一歩一歩確実に近付いていた。

何が俺を動かしているのだろう。

バカな俺には到底わかるはずもなく、気付いたら君の目の前に立っていた。

「ん？」

君はビックリする事もなく顔を上げて、その綺麗な瞳で俺を見つめた。

「あっ…いや…そのぉ…」

言葉を濁らす俺…

君の瞳に俺はどう映っていたのだろう。

やっぱり変人に見えたかな？

それとも…ただの馬鹿？

だけど俺は君が思うよりも相当な馬鹿人間だと思うよ。

何故なら…

「あっ…えぇとぉ…おっ俺はいつまでも君を想い続けます！」

初対面でいきなり告白だもん…

そんなのはただの馬鹿じゃない…

頭がいかれた大馬鹿人間だよ。

何故、俺もこんなに生徒が見てる前でこんな大胆な告白をしたのかは分からない。

だけど…君を見た瞬間に俺の体は自由が効かなくなってたんだ。

まるで神様がイタズラしたかのように…

まだ数秒しか経っていないはずなのに俺には凄く長い時間に思えた。

君の顔を見る事が出来ず、ずっと目に力をいれて閉じていた俺…

そんな俺の唇にそっと触れた柔らかい感触。

こんなの今までで一度も経験した事がない。

俺の思考回路は混乱の渦に呑み込まれていた。

この謎を解き明かすため俺は力の入った目蓋をゆっくり、そして徐々に開けた。

その瞬間、俺は驚きのあまり目を大きく見開いて目の前の光景を疑った。

俺が驚いた理由…

それは、さっきまで不思議そうに見ていた君が俺のすぐ目の前にいて、キスをしていたから。

初対面の人にいきなり告白した俺は大馬鹿者だが、キスをする君はもっと大馬鹿者なのか？

もしかしたら俺はとんでもない女に告白してしまったのだろうか？

君は馬鹿な俺を試して楽しんでるのか？

俺の考えを無視するかのように君はキスを止めると笑顔で俺に答えた。

「私もあなたを想い続けます」

これが、俺と君の初めての出会いであり会話だったんだ。

夢と小説

ねぇ？知ってる？

アナタが私を一目惚れさせた理由を。

ねぇ？覚えてる？

アナタがどんな顔で私に告白したかを。

私は覚えてるよ！

あの時のアナタの顔も…仕草も…声も…匂いも…

そして絶対に忘れる事の出来ないのがアナタが私に告白したあの言葉。

――いつまでも君を想い続けます――

ねぇ？気付いてた？

アナタが言ったあの言葉が私のユメだった事を…

私の読んでた小説に出てくるセリフをアナタは私の目の前で言ってくれた。

私の生涯のユメであるセリフをアナタは顔を赤く染めながら叶えてくれた。

その時、顔も名前も知らなかった初対面のアナタに…私の心は奪われてしまったの。

私は神様がイタズラをしたのだと思った。

だって…まさか知らない男の人が私のユメを叶えてくれるなんて思って無かったから。

だから私はそんなイタズラ好きの神様に少し抵抗をしたの。

そう…ほんの少しだけの抵抗…

神様の口を塞ぐ為のキス。

それが神様への抵抗であり、アナタへの返事でもあった。

ねぇ？アナタはいきなりキスをした私をどう思った？

変な女だと思った？

バカな女だと思った？

私はアナタにどう思われてもいいよ！

だってアナタは私のユメを叶えてくれた神様なんだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8843w/

君を想い

2011年11月10日11時04分発行